

ハイデガーと三木清の交差と分岐

——技術と自然をめぐる(1)

はじめに

現代では、哲学における「技術」の問題の重要性がますます増してきているのは、いうまでもないことだろう。村田やクレールバークが強調しているように、「技術」の問題はもはや哲学の応用的分野という周縁的な問題ではなく、哲学の根本的な問題とみなされつつある(vgl. 村田 [2023], 17 ff./Coeckelbergh [2020], 4 ff.)。「技術」の問題を哲学の根本的な問題として思索した代表的な哲学者として、マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の名を挙げることができる。『技術への問い』(1953)において彼は、現代技術の本質を「総かり立て体制 *Ge-stell*」(GA 7, 20)と名指し、全ての存在者を特定の目的へと調達するように駆り立てていくあり方として現代技術を描き出した。ハイデガーによれば、この現代技術の本質たる「総かり立て体制」は、存在をイデ

アとして理解する西洋形而上学の歴史の帰結にはかならないのだ。

岡田 悠汰

現代の技術哲学の多くは、このハイデガーの技術論を批判することから出発している。その代表例は、アイディを嚆矢とするいわゆる「ポスト現象学 *Postphenomenology*」の立場である(vgl. Ihde [2009], 5 ff.)。この立場に立つ者たちは、ハイデガーの技術論が技術一般を「総かり立て体制」として十把一絡げに論じているとして批判する。彼らによれば、現代技術の本質を「総かり立て体制」という存在の開示の仕方に見て取るハイデガーの技術論は、技術によって社会のあり方が決定されるという「技術決定論」の一種であり、翻っていえばわれわれには主体的に社会を変革する余地がないという点で「ディストピア的」である。また、ライン川の水力発電のタービンにエネルギーの挑発をみる一方で風車に自然との調和をみる点で「ロマン主義的」で「ノスタルジック」な

ものである。こういったハイデガーの本質主義的な技術論にたいして彼らは、技術と社会の相互的な影響関係を重視する社会構成主義的な立場をとる。つまり彼らによれば、技術とは、ハイデガーが理解するような抽象的かつ悲観的なものではなく、より具体的に多様な様相、アイディの言葉を借りれば「複数安定性」(Inde [2009], 12)をもっているものだとする。すなわち技術とは、特定の目的へと一方向に向かっていくものではなく、その発展のなかで多くの社会的な要因が関わってくる⁽²⁾。以上の理由より、こうした研究者たちは、ハイデガー的な抽象的技術論に対峙して、個別・具体的な技術の多様性に探求の目を向け変えるよう主張するのだ。技術哲学におけるこの目の向け変えは、「経験的転回 empirical turn」(Achenhuis [2001], 6)として現代の技術哲学の潮流を主導してきている⁽³⁾。

もしハイデガーのいう「総かり立て体制」という問題意識を引き受けるとすれば、現代技術の問題は西洋形而上学の問題にはかならないだろう。しかし、ハイデガーが同時に地球規模での「ヨーロッパ化」を指摘したことに鑑みれば (vgl. GA 12, 98)、「総かり立て体制」も西洋という局所における問題にとどまらないであろう。では、こうしたハイデガーの提示した問題にたいして、日本の技術哲学はどのような意義を果たしうるのであろうか。例えばユク・ホイが、ハイデガーの問題意識を引き継ぎつつも、技術哲学における「技術」が西洋的な観点からのみ論じられていることを疑問視し、「中国における技術への問い」を展開するように (vgl. Hu

[2016])、技術哲学は「間文化哲学 Intercultural Philosophy」としても取り組まなければならないだろう。日本哲学における技術哲学を見直すことを通じて、現代の技術哲学の文脈での日本哲学の役割を考えたいことは、われわれに課せられた課題のように思われる。

無論、論者がここでこの壮大な問いに直ちに取り組むことはできない。そこで本稿では、以上の問題意識を背景にしつつ、このプロジェクトに取り組むための準備段階として、日本哲学において「技術」の問題に取り組んだ代表的な哲学者である三木清 (1897-1945) の技術論に取り組みたい。彼の技術論のエッセンスは、彼の主著とも目される『構想力の論理 第一』(1939) の第三章「技術」と『技術哲学』(1941) にまとめられている。

ここで注意しなければならないのは、ハイデガー、ポスト現象学を中心とした経験的転回以後の技術哲学、三木清の三者が問題とする「技術」という概念の内実の違いである。例えば、ハイデガーが「総かり立て体制」として問題にしているのは、技術そのものというよりは、むしろ技術的な存在了解によって、全ての存在者が特定の目的のために「役に立つもの」としてかり立てられるという事態である。他方で、例えばポスト現象学が主題化するのは具体的な技術的人工物やそういった人工物と社会との関わりである。そして三木にとつての「技術」とは、これから詳しくみていくが、行為としての技術であり (vgl. MKZ 7, 197)、芸術も含んだ創造行為一般としてのいわば「技」だとこえる。現代の技術哲学の

潮流を視野にいれつつ、ハイデガーの問題意識から三木の技術論を読むという本稿の試みにとって、そもそも「技術」という語で含意される事柄の差異は、避けがたい問題となるだろう。しかしそれぞれが「技術」という語で意図している事柄が異なっていたとしても、それが直ちに議論の断絶を意味するわけではない。むしろ「技術」という問題を哲学の根本問題として展開していくための土台を築くことが、「技術」をめぐる今後の生産的な議論にとって不可欠だと思われる。

1 三木の技術論

ハイデガーの技術論と比較すると、三木の技術論はどこか「楽観的な」印象を与えることは否めない⁽⁴⁾。三木の技術論（一九三〇年代後半から一九四〇年代初頭）とハイデガーの技術論（一九五〇年代）の時代背景の違いに、その原因を求めることもできるかもしれない。例えばそれは、原子力爆弾が投下された第二次世界大戦の前後という違いもあるだろう。しかし論者のみどころ、三木の技術論がある意味で楽観的であるということは単なる印象論にとどまるのではなく、彼の議論内部からその要素を見出すことができるだろう。ハイデガーとの「技術」にたいする評価の違いも単純に時代背景の違いに還元できるものではなく、両者の哲学的立場の違いから検討されてよい。したがって、論者が三木の技術論に抱くこの印象は、ハイデガーとの比較を通じて、より明瞭に言語化されるであろう。そして両者の比較から、現代の技術哲学に通じる論点が見出されるだろう。

1・1 構想力の論理

まずは、『構想力の論理』と『技術哲学』から三木清の技術論の要点を確認しよう。ハイデガーの技術論の背後にあるのが「存在の思索」であるならば、三木の技術論を支えるのは「構想力の論理」である。もともと研究ノートであった『構想力の論理』を出版したさいに付された序から明らかなように、三木の最大の関心は「ロゴスとパトスの統一」である（*see* MKZ 84ff.）。つまり、客観的なものと主観的なもの、合理的なものと非合理的なもの、知的なものと感情的なものはいかにして結合するのか、この問いこそが三木の思索を駆動するものである。構想力の論理とは、この「ロゴスとパトスの統一」を可能にするものにほかならない。

「構想力 *Einbildungskraft*」は、カントをはじめとした哲学史上の重要概念であったし、三木に影響を与えたハイデガーもまた、『カントと形而上学の問題』（1929）で着目した概念であった。しかしここでの構想力は、カントが考えたように感性と悟性を綜合するものにとどまらない。三木の構想力の論理は、単に認識論の次元にとどまるのではなく、われわれの「行為」の次元へと展開される。構想力の論理とは、行為の哲学にはかならない（*vgl.* MKZ 8, 6）。ここで重要なのは、「行為」が広義における「作る（こと）」すなわち「制作」と結びつけられることである。ここから、三木の技術哲学の重要概念である「形の変化／転形 *transformation*」の議論が導かれる。

すべての行為は広い意味においてものを作るといふ、即

ち制作の意味を有している。構想力の論理はそのような制作の論理である。一切の作られたものは形を具えている。行為するとはものに働き掛けてものの形を変じ (transform) し新しい形を作ることである (MKZ 8, 7)。

三木にいわせれば「技術」の問題は、「制作の論理」としての「構想力の論理」の問題にはかならない。引用部における「ものの形を変じて新しい形を作ること」という制作行為の定義それ自体は、われわれの日常経験からして容易に理解できよう。しかし「形の変化 transformation」は、いかなる理路によつてロゴスとパトスを統一する構想力の論理と結びつけられるのであろうか。「形の変化」としての「技術」がロゴスとパトスを統一する構想力の論理と結びつけられるのであれば、技術において、ロゴスないし客観的なものと、パトスないし主観的なものとにそれぞれあたるものは何なのであらうか。

1・2 「形の変化 transformation」をつつの技術

「技術」と「構想力の論理」とを結びつける鍵となるのが、「形 form」である。三木によれば、「形」は技術の根本概念であり、この「形」が見られるところに構想力が見出される。つまり何らかの主観的なものが、「形」を得て客観化されるところに構想力の論理が存している。「構想力の論理とは形の論理である」(MKZ 8, 227)。翻つていえば、構想力の論理の現れとしての技術は、制作行為を通じて主観的なものに客観的な

「形」を与えることである。では、ここで「形」を与えられる「主観的なもの」とは何か。それは、三木によれば、人間の意志や意欲である。

技術は人間の意欲に物体的な形を与えるものである。それは物の客観的な因果関係を人間の主観的な目的に結合するものである。しかるにもし人間の欲望や意志が単に主観的なものであるとすれば、それは如何にして物の客観的な関係と結合され得るのであろうか。その場合目的といわれるものは何等か形としてすでに客観的限定を含むものでなければならぬであらう。技術における目的原因はアリストテレスが考えたように εἶδος (形相) でなければならぬ。欲望や意志が形となるのでなければ、それは技術の中へ入ることができぬ。かように形となる欲望や意志がまさに構想力である。構想力において主観的なものは形となつて主観から脱け出るのである。動物は身体器官の奴隷であるが、人間は道具を支配しこれによつて身体的な欲望の主人となることができる (MKZ 8, 228)。

ここから明らかなように、ロゴスとパトスの統一としての構想力の論理は、技術において物理的な自然における因果関係と、われわれの意志や意欲にあらわれる目的の結合として展開される。したがつて三木によれば、技術の本質は、物の客観的な因果関係と人間の主観的な目的とを総合するものとし

て、因果論と目的論の統一なのである (vgl. MKZ 8, 228f. MKZ 7, 218)。構想力の論理としての技術は、素材の特質を活かして目的に適った道具を制作するように、いわば自然法則の因果関係と調和的な仕方での人間の目的を「形」として実現していくことだといえよう。

人間は、自然法則から切り離されることはないがしかしその奴隷となることなく、技術によって自らの主観的な目的を自然の因果関係と調和的に客観化することができる。三木の議論にしたがえば、この点に本能という自然法則にのみしたがって行動する動物との違いが存している。三木は、単に自然の因果関係にとらわれず、むしろ因果関係と共に目的を客観的な「形」へと実現する技術のありように、技術の創造性を見出している。「技術は創造的であり、技術によって世界は新しい形を獲得する」(MKZ 8, 229)。ゆえに三木の技術論の根本概念たる「形の変化 transformation」は、自然の客観的な因果関係と主観的な目的との間に調和を見出しつつ、目的を単に主観的なものにとどめることなく客観的な「形」を与えて現実化させることによって新しい世界を形作る技術の創造性をあらわすものにはかならない。

1・3 環境への適応

このように、新しい形を創造する「形の変化／転形 transformation」としての技術は、人間の目的と自然の因果関係との調和を前提としている。しかしこの調和は、何を根拠に前提されているのだろうか。三木は、人間と自然との調和を「環

境への適応」から説明している。

自然の歴史は形の変化 transformation の歴史であると云うことができる。生命的自然の有する形は主体と環境との適応の関係から作られるものである。人間の技術も根本において主体と環境との適応を意味している。技術によって人間は自己自身の、社会の、文化の形を作り、またその形を変じて新しい形を作ってゆく。文化はもとより人間の行為の諸形式も、社会の種々の制度も、すべて形である。人間の歴史も transformation (形の変化) の歴史である。自然史と人間史とは transformation の概念において統一される (MKZ 8, 237)。

三木のみるところ、生物がまわりの自然環境に適応するために新しい形態を獲得するように、自然は自らの形を変化させるといふ点で技術的である。人間も環境のなかに存在する一つの生物種として環境への適応が不可欠であるが、人間は道具の制作に限らず、制度や行動様式を形成するという広義の技術によって環境への適応を行っている。つまり、自然(客観的な因果関係)も人間(主観的な目的)も、「形の変化 transformation」による適応を行っているという事実によって、人間の目的と自然の因果関係は「形の変化」としての技術による統一が果たされるのである。

しかし、そもそも環境への適応が必要であるといわれるとき、人間と自然との調和は最初から前提されているのではない

く、むしろ適応という努力によってはじめて両者の調和が可能であることを意味しているように思われる。つまり、環境への適応という発想自体が、人間と自然とが対立しうることを前提している。人間と自然、すなわち主観的なものと客観的なものという対立するものを統一・調和させることによって、人間が環境へと適応するための行為の新しい形を樹立すること、このことを三木は「発明」と名指している (vgl. MKZ 7, 228 f.)。

ここで注意しておきたいのは、「三木における「発明」と「発見」の区別である。三木は、技術の本質を「発明」に見て取っている (vgl. MKZ 8, 238; MKZ 7, 224)。一方で「発見」とは、すでに存在していたがわれわれに隠されていたものを新たに見出すことである。この場合、隠されていたものそれ自体は、すでに存在していたものであるため新しいものではない。他方で「発明」は、以前は存在していなかったものを新たに作り出すことである。「発見」はすでにあるものの「顕示」であるのになし、「発明」は新たなものの「創造」である。しかし無論、技術は因果関係と調和的である限り、いつでも因果法則にしたがった合理性を有しているのであるが (vgl. MKZ 7, 233 f.)、技術による発明を通じて人間の環境への積極的な適応を主張する点に、三木の技術論が孕む人為重視の傾向が見て取れる。

1・4 技術と社会

主観的な目的と客観的な因果法則との調和による新たな形

の創造のほかに、三木の技術論の大きな特徴をなすのは、技術の社会的性質への着目である。三木が文化や人間の行動様式、社会制度を技術的なものとみなしていることはすでにみたとおりである。では、技術はいかにして文化・制度となるのであろうか。三木は、マンフォードを引きながら技術どうしが相互に関連して「技術複合体」なるものを形成することを指摘したうえで、技術が制度化するプロセスを「発明」「模倣」「伝播」という流れによって説明する。

技術はもと発明であるにしても、その発明が模倣され伝播することがなければ技術複合体というものは成立し得ない。なぜなら技術複合体は発明に属する技術が現実使用されることによって形成されるものであるが、この現実の使用は発明に対して模倣の意味をもっている。発明が一回的なものであるのに反して模倣は反復であり、かような反復は技術の制度化に必要な要素である。模倣は社会的なものであり、社会の成立の原理でさえある (MKZ 7, 264)。

このように、「発明」されたものが「模倣」され、社会的に「伝播」し社会に受容され制度や文化になるというこのプロセス自体は、これまでの技術の発展の歴史をみれば容易に理解できるだろう。自動車の「発明」は、社会的な「伝播」と受容を経ていわゆる「車社会」を作り、新たな法律・制度を生み出したであろうし、現代ではスマートフォンやAIも同様のプ

ロセスを辿っているといえよう。

しかしこのような技術の制度化は、新たな「形」の獲得という積極的な面をもつ一方で、社会にたいして強制力をもつという点では、われわれの生活への抑圧にもなりうる。例えば、スマートフォンが普及し制度化した現代社会では、あらゆる場面でスマートフォンの使用が不可欠であり、強制されることさえある。その結果、スマートフォンをもたざる者、すなわち制度化された技術に参画出来ない者は容易に排除され、そういった者の存在は可視化されなくなるだろう。三木もまた技術のもつこういった消極的な面を決して無視してはいない。

すべて人間の作るものは人間の生活を発展させると共に人間の生活に対する桎梏になる。これは歴史の一般的法則であるが、技術の場合においても認められることである。技術が如何に人間の生活の発展に貢献したかは更めて述べるまでもなく明かであろう。しかしそれはまた人間の生活を抑圧し破壊することになり、そこに技術の社会的・道徳的問題を生ずるに至ったのである (MKZ 7, 270)。

三木は、技術の社会的性質に着目することによって、技術の問題を道徳的問題へと展開させる。しかし三木が問題を見出すのは、技術そのものにおいてではなく、技術が使用される社会的関係においてである (vgl. MKZ 7, 278 f.)。換言すれば、

技術それ自体に善悪といった道徳的価値が帰属するのではなく、技術が入り込んでいる現実の社会的関係から道徳的価値が生じてくる。こういった理解から三木は、技術による弊害の克服にさいして技術による社会的統制が必要であると考えている。

「…」苟も実際に否定し得ない如く技術の弊害と考えられるものが存在する以上、技術には少くとも一定の社会的経済的関係においては弊害を生じ得るような性質がそれ自体にあるのでなければならぬであろう。かようにして技術は現実において社会的諸関係の中に入り込んで存在するのであつて、その害悪が生じないようにするためには技術をその自然生長性に任せておくことなく、これに統制を加えること、ゾンバルトのいわゆる「技術馴致」*Zähmung der Technik* が必要である。技術についての単なるベシミズムも単なるオブティミズムも間違っている。大切なことは技術の計画化である。しかるに技術を馴らすということはそれ自身また一つの技術、自然科学的技術でなくて社会科学的技术に属することである (MKZ 7, 280 f.)。

引用部からわかるように、三木は技術それ自体に害悪の要因を認めなくとも、技術による弊害が現実起こっている以上、社会のなかでわれわれが技術のなすがままに任せることを問題視する。三木によれば、技術による弊害を回避するために

「技術馴致」、すなわち技術を上手くコントロールすることが要求される。つまり社会的に技術をいかに統制するかによって、技術は有害なものにも有益なものにもなる。それゆえ三木にいわせれば、技術の進歩に関してその害悪を強調するバシズムも、その害悪はさらに洗練された技術の開発によって克服できると素朴に信じるオプティミズムも間違っている。技術の害悪については、自然科学的技術の内部のみで議論されるのではなく、自然科学的技術を社会的に統制する社会科学的技术を考慮に入れなければならないのである。

2. ハイデガーの技術論との交差

さて本稿は、ハイデガーの問題意識から三木の技術論を読解することを試みるものであるが、以上の三木の技術論は、ハイデガーの技術論と果たして接続可能なのだろうか。たしかに「構想力の論理」が体现される創造行為としての技術を関心事とする三木と、現代技術の本質たる「総かり立て体制」として露わになる西洋形而上学の帰結を問題とするハイデガーとでは、そもそも両者の間で問題関心の方向性が共有されているとはいいがたい。しかしそれでもなお、われわれは「技術」をめぐる両者の議論の間に交差する論点を見出すことができるだろう。例えば三木にとっての「ロゴス」と「パトス」の統一という問題は、ハイデガーにおいては「企投Entwurf」ないし「了解Verstehen」と「被投性Geworfenheit」ないし「情態性 Befindlichkeit」との間の等根源性の問題として理解されうるだろう⁽⁵⁾。この点も両者の議論を突き合わ

せるために重要な論点を含んでいるが、本稿では、技術論により本質的に関わるであろう論点を三点に絞って提示したい。

第一に、「技術と社会」という問題である。前節で確認したように、三木の技術論の特徴の一つは、技術の制度としての社会的側面への着目であった。三木によれば、技術は発明の社会的な模倣や伝播によって制度化されるものであるため、現実の社会的関係から考えられねばならない。技術の社会的側面を三木が考察するさいにハイデガーの道具連関の議論を参照していることからもうかがえるように (vgl. MKZ I, 288)、技術の社会的側面は三木とハイデガーとを取り結ぶ重要な論点の一つであろう。とりわけ技術の制度化という問題は、ハイデガーの「総かり立て体制」に結びつきうるもののように思われる。三木の議論において、技術が社会的な模倣や伝播によって制度化される傾向を有しており、こうして制度化された技術がわれわれの生活の桎梏として抑圧的に機能しうることはすでにみた通りである。特定の目的へ向けて「役に立つ」仕方であらゆる存在者を調達するように駆動する「総かり立て体制」もまた、手段－目的あるいは質料－形相の連関という技術に典型的に見出される目的論的な枠組みが制度的な強制力を持ち、その制度のうちにあらゆる存在者が巻き込まれていく事態として理解できるだろう。「総かり立て体制」による特定の目的への調達という議論が、全体主義のみならず、世界中を巻き込む資本主義的経済システムや新自由主義の問題としても考えられるように⁽⁶⁾、技術を社会的関係において考えるということは、「総かり立て体制」の問題

を具体的な次元で考えるということにもつながるだろう。

次に取り上げるべきは、「発明」と「発見」の区別である。すでにみたように、三木は以前になかったものを創造する「発明」とすでに存在していたものを明るみにもたらす「発見」を区別したうえで、技術の本質を創造的な「発明」に見出していた。これにたいしてハイデガーは、三木の区別にしたがえば、技術の本質を「発見」に見出しているといえよう。というのもハイデガーは、創造行為一般をギリシア語の「ポイエーシス *poiēsis*」から捉え、隠れを隠れなさへともたらすこととして理解するからである (vgl. GA 7, 12f.)。このような理解からハイデガーにおける技術もまた、存在者を隠れなさにもたらすものであり、それは「隠れなさ」としての真理の問題に結びつけられるのである。したがって技術に新たなものの創造を見て取る三木とは対照的に、ハイデガーが技術に見て取るのは、存在者のありようを明るみにもたらすこと、すなわち顕示にはかならないのである。

最後に注目したいのは、構想力の論理としての技術において鍵となる「形」である。今一度確認すると、三木にとっての技術とは、人間の主観的な目的に自然の因果法則と調和的な仕方での新しい「形」を与える創造行為である。このさい三木の議論は、アリストテレス的な質料－形相論の枠組みのうちにあるといえよう。たしかに三木自身はアリストテレスの形相がギリシア的な実在に結びついており不変的で非歴史的であることを批判している (vgl. MKZ 8, 8)。しかし他方で、技術における目的因がアリストテレス的な「形相」として考

えられていることに鑑みれば (vgl. MKZ 8, 228)、「形」を与える創造行為としての技術は質料－形相論の枠組みのうちにあるといつてよいだろう。

現代技術の本質とされる「総かり立て体制」も、質料－形相論に支えられているといえる。そもそも「総かり立て体制」とは、ハイデガーによれば西洋形而上学の帰結であるのだが、この西洋形而上学において支配的であったのがイデアにはかならない。ハイデガーにいわせれば、いわゆる質料－形相論もイデアの軀のもとにある西洋形而上学において影響力をもってきたのであり、その影響力ゆえに存在とは「制作されていること」として理解されてきたのだ (vgl. GA 65, 19f.)。しかしハイデガーは、技術も芸術も含んだ創造行為一般を質料－形相論的な「形の論理」から考える三木とは異なり、技術（とりわけ現代技術）と芸術を区別する。この区別は、特に現代技術の近代性を問題にするハイデガーにとって重要である。というのも彼は、イデアの軀のもとにある西洋形而上学を克服するという目論見のもと、質料－形相を換骨奪胎し、西洋形而上学とは異なった仕方での存在を問う可能性を芸術に見出すからだ⁷⁾。したがって三木もハイデガーも、技術を質料－形相と関係づけて思索を展開する一方で、質料－形相論への態度の違いから技術にたいする見方が異なっている。すなわち、三木は技術と芸術を区別することなく新しい「形」を与える創造行為として捉える一方で、ハイデガーは技術（とりわけ現代技術）を芸術と区別したうえで、現代技術にイデアの軀のもとにある西洋形而上学の帰結を見て取る。この技

術観の違いは、三木が質料―形相論を積極的に引き受けて技術に「創造」というポジティブな側面を見出すのに対し、ハイデガーが西洋形而上学的な質料―形相論と現代技術とを密接に結びつける仕方で論じること、現代技術のネガティブな側面を見出すという違いにつながっている。

3. 三木とハイデガーとの分岐

すでに述べたように、三木の技術論はハイデガーと比べて、楽観的であるという印象を与える。技術にたいするこのような態度の相異は、何によるのであろうか。

論者のみるところ、三木の技術論が楽観的でありうるのは、その理論を支える「人間と自然の調和」という前提ゆえである。すでに確認したように、この前提は「環境への適応」によって説明される。「環境への適応」にあらわれる「人間と自然の調和」という前提によって、人間の主観的な目的と自然の因果法則とを一致させた仕方で新しい「形」を与える技術が可能になっている。つまり、三木の理路では、対立する人間と自然が技術によって調和するのでなく、むしろすでに「人間と自然の調和」が成り立っているからこそ、それが技術における目的論と因果論との一致としてあらわれうるということになるのだ。この「自然」、あるいはハイデガーのいうところの「ピュシス」にたいする態度の違いにこそ、両者の技術にたいする態度の違いが由来しているのではないか。そもそも三木の問題関心は、「ロゴスとパトスの統一」であった。しかしおそらくハイデガーの立場によれば、「技術」

について思索するにあたっては、「ロゴス」と「パトス」のほかに「ピュシス」の問題を避けることはできないといえるだろう。三木が問題とするのはあくまで「自然」や「環境」であって、それはわれわれを規定するものであったとしても、自然科学的な因果法則から考えられている。つまり三木にとっての「自然」や「環境」は、結局「ロゴスとパトスの統一」として理解されうるかぎりでの、われわれ人間の理解の枠内にとどまっているように思われる。だからこそ三木は、「人間と自然の調和」が可能なることを前提とすることができているのではないか。しかし「ピュシス」は、いみじくもヘラクレイトスが「ピュシスは隠れることを好む」といったように、われわれ人間の理解を越えてくる。つまり「ピュシス」は、単に自然科学的な因果法則で説明されうる「自然」ではなく、時にわれわれ人間に襲い掛かって来る強大な力として現出するのだ。このわれわれの理解や力能を越えた「ピュシス」の力は、例えば自然災害を通じて、日常的に成り立っているように見える「人間と自然の調和」を崩壊させることもあるだろう。三木の技術論には、このような「人間と自然の調和」を乱してしまうような「ピュシス」への洞察が欠けているように思われる。三木は、「人間と自然の調和」がそもそも可能なのかという問いを立てていない。だから技術は、新しい「形」の「発明」だとしても、実のところその発明とは「人間と自然の調和」の「発見」にすぎないのである (cf. MKZ 7, 202).

これにたいしてハイデガーは、技術を「ピュシス」との関

係から思索する。例えばハイデガーは、バラの開花の如く立ち現れる「ピュシス」の動向に最高次の「ポイエーシス」を見て取っている (vgl. GA 7, 12)。これだけをみれば、ハイデガーは、自然にたいしても技術的なものを認める三木と立場を同じにしているように思われるかもしれない。だがしかし、ハイデガーは、「ポイエーシス」を通じた人間と「ピュシス」との協働を認めるとしても、両者の関係は人間の目的と自然の因果法則とが一致するという調和的なものではない。ハイデガーにとつて「ピュシス」とは、人間を超えた力として立ち現れて、われわれのあり方を規定するものである (vgl. GA 40, 65 f.)。本来は人間を超えた力として立ち現れる「ピュシス」が、西洋形而上学的な質料・形相論から捉えられ、あたかもわれわれ人間の操作可能なものとしての様相を呈すること、このことが西洋形而上学の帰結としての「総かり立て体制」が含意していることである。つまりハイデガーにとつての技術は、人間を越えた「ピュシス」を覆い隠してしまうものにはかならない。こういったハイデガーの立場からすれば、三木の技術論は、依然として西洋形而上学の立場にとどまっているものに過ぎないとされるかもしれない。

管見では、三木の「自然」とハイデガーの「ピュシス」、この両者の違いが技術にたいする態度の違いを導いている。つまり、三木は因果法則によって理解される「自然」との調和を前提するゆえに技術に積極的なものを見出しているが、ハイデガーは人間の理解を越える「ピュシス」の襲い掛かりを重視するゆえに、技術（とりわけ現代技術）には消極的な

可能性を見出している。三木の技術論が「楽観的」でハイデガーの技術論が「悲観的」にみえるのは、このためである。人間が自然と調和した仕方でも新しい「形」を創造できるとする三木の技術論は、人間知性への信頼によって成り立っているように思われる。だからこそ、三木によれば「技術馴致」という社会科学的技术によって技術を社会的に統制することができるのである。これにたいしハイデガーの技術論は、「ピュシス」に規定される人間の有限性が前提されている。ゆえにハイデガーは、技術を社会的に統制するといったことを主張することなく、あくまで技術について問い、思索することを要請するのみである。

結論にかえて

ハイデガーの技術論は、現代技術の消極的な側面に焦点を当てて、それにたいして何ら具体的かつ実践的な方策を示していない。これとは対照的に、社会科学的技术によって自然科学的技术を統制する重要性を説く三木の技術論は、現代において実践的な意味をもちうるといえるかもしれない。しかし、三木がいうように、あらゆる技術が「人間と自然の調和」のあらわれにかならないのであれば、技術のもつ社会的側面にたいしていかに批判的でありうるのであろうか。三木が主に関心をもつ技術の社会的側面は、あくまでわれわれの技術の使い方であって、技術そのものではない。しかし実際に技術は、われわれの規範やバイアスを反映するものとしてそれ自体社会的な役割を果たしている。例えば人工知能

が、そのアルゴリズムに含まれる避けがたいバイアスによって、意図せず差別的な意思決定を行ってしまうという問題は、技術そのものが社会的・政治的役割を果たす一例としてよく指摘されてゐる (vgl. Coeckelbergh [2020], 151 f.)。技術は、まさに社会的規範やバイアスを映し出すがゆえに、一部の他者(たいていは少数者)にたいして排他的でありうる。しかし「人間と自然の調和」が前提された技術論では、技術にあらわれる社会的規範やバイアスにたいして批判的ではありえず、それもまた「自然との調和」として甘受されてしまうのではないだろうか。

おそらく三木にいわせれば、技術にあらわれるこうした社会的規範やバイアスへの批判は、目的の発明という社会科学の技術によって可能なのであろう (vgl. MKZ 7, 285)。つまり、技術は文化や制度を創造しうるので、適切な目的を発明することができれば、技術によって新たな規範を生み出すことができるということである。ここにも三木の人間知性にたいする信頼が見て取れるであろう。しかし、われわれが問わねばならないのは、技術に入り込んでいる規範といった社会的関係の桎梏のなかで、そもそものに新しい目的を発明できるのかということである。ハイデガーのいう「総かり立て体制」なるものを認めるとして、われわれは依然として三木のように技術の創造性に希望を見出しうるのか。それともやはり、ハイデガーのいうように、有限なわれわれが技術を問うなかで「救い」を待つほかないのであろうか。はたまた日本哲学における技術の思索は、西洋形而上学の帰結としての「総か

り立て体制」にたいして、新たな可能性を呈示しうるのだろうか。

【註】

(1) 本稿は、二〇二四年一月二八日に大阪大学豊中キャンパスで行われた大阪大学グローバル日本学教育研究拠点主催のシンポジウム「京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在」において、「ハイデガーから三木の技術論を読む——現代技術哲学への寄与に向けて」という題で発表した原稿を改稿したものである。シンポジウムに提題者として招待してくださった織田和明氏、および当日のディスカッションの参加者に感謝申し上げる。

(2) また村田によれば、技術の成立過程のなかで、様々な社会的要因の間での解釈の争いがあり、そのかぎりでは技術的製品は特定の目的に回収されず「解釈の柔軟性」(村田 [2023], 194) をもっている。

(3) 技術哲学における「経験的転回」については、アクターハウスや、アイディ、フェルベークによる説明を参照せよ (vgl. Achenhuis [2001], 6 ff./ Inde [2009], 20 ff./ Verbeek [2011], 161 f.)。なおポスト現象学におけるハイデガー批判は、ハイデガー研究の見地から再検討する必要があることはいうまでもない。これに関しては、稿を改めて論じることとする。

(4) もちろん注意しなければならないのは、後にみるように三木自身は「技術」に関するペシミズムにたいしても、オプティミズムもたいしても、批判的であるということである (vgl. MKZ 7, 280)。

(5) そもそも三木の『構想力の論理』は、ハイデガーの「カン

トと形而上学の問題」から影響を受けていることに注意しなければならないであろう。この点については、稿を改めて論じたい。

- (6) 森は、まさに「総かり立て体制」をいういた社会システムと結びつけた問題として考えている (vgl. 森 [2020], 152 ff.)。
- (7) ハイデガーの芸術論が、イデアおよび質料・形相にたいする批判から成り立っているということについては、拙論を参照せよ (vgl. 岡田 [2022])。

【凡例】

- ・ハイデガーの著作からの引用は、以下の略号を用い、括弧内に略号と頁数を併記して箇所を示す。

GA= Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975-

SZ= Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 19 Aufl., 2006

- ・『三木清全集』全19巻 (岩波書店、1966-1968年) からの引用は、MKZのあとに巻数と頁数を併記する。また引用にさいしては、旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。

【文献表】

Achterhuis, Hans, "Introduction: American Philosophers of Technology," in *American Philosophy of Technology: The Empirical Turn*, edited by Hans Achterhuis, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2001

Coeckelbergh, Mark, *Introduction to Philosophy of Technology*, Oxford University Press, 2020 [M. クーケルバーク『技術哲学講義』、直江清隆／久木田水生監訳、丸善出版、2023年]

Hui, Yik, *The Question Concerning Technology in China: A Essay in Cosmotechnics*, Falmouth: Urbanomic, 2016 [エック・ホイ『中国における技術への問い』宇宙技芸試論、伊勢康平訳、2022年]

Inde, Don, *Postphenomenology and Technoscience: The Peking University Lectures*, Albany: State University of New York Press, 2009

Verbeek, Peter-Paul, *Moralizing technology: understanding and designing the morality of things*, Chicago: The University of Chicago Press, 2011 [ピーター・ポール・フェルベーク『技術の道徳化』、鈴木俊洋訳、法政大学出版局、2015年]

岡田悠汰「ハイデガー『芸術作品の根源』における真性の問題」、関西哲学会年報『アルケー』第30号所収 (67—77頁)、2022年

村田純一『技術の哲学』、講談社学術文庫、2023年

森一郎『核時代のテクノロジー論』、現代書館、2020年

本研究は、JSPS 特別研究員奨励費 (課題番号: 24K10021) の助成を受けたものである。